

## 21世紀初頭の課題—難治癌対策

日本癌学会シンポジウムより



..... 金沢大学がん研究所 腫瘍外科 教授 (前所長) 磨伊 正義 .....

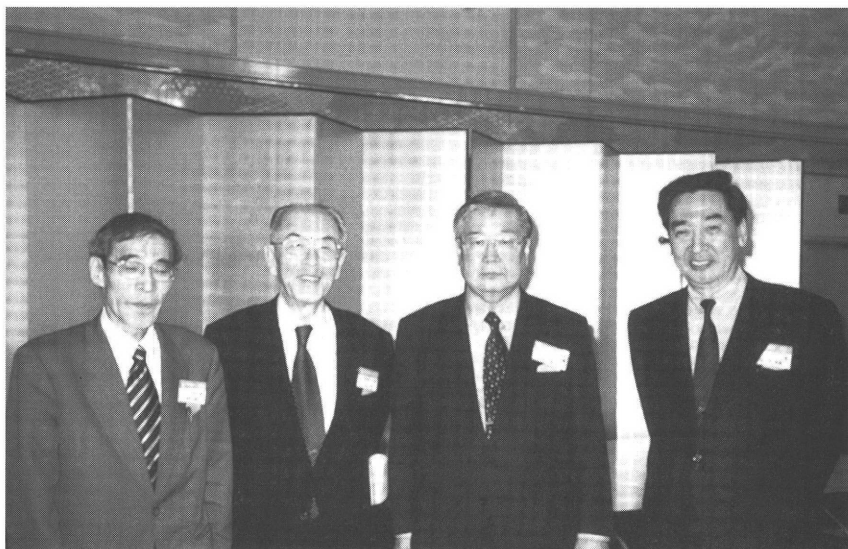
わが国の癌死亡者数は年々増加しており、厚生労働省が本年1月に発表した「平成13年人口動態統計の年間推計」によると、2001（平成13）年の癌による死者数は30万人にのぼる見通しとなったと報告している。この増加の理由として長寿社会到来という指摘もあるが、もう一つ見逃してならない理由に現行の癌治療では治癒しにくい癌、いわゆる難治癌が増えてきていることが挙げられる。確かに、胃癌や大腸癌の5年生存率は70%にも達しようとしている一方で、スキルス胃癌は早期発見が困難で発育、進展が早く、その治療成績は20～30年前の治癒率とほとんど変わらず、消化管の難治癌の一つである。この難治癌の定義は決まったものがないが、脳腫瘍、肺癌、膵癌、胆嚢癌、白血病などのように、現行の治療では、5年生存率が30%以下の癌を難治癌とすべきであろう。これらの多くは早期発見が困難なために、発見された時には現行の治療法では治癒しがたいほどに進行しているのが現実である。早期に発見されれば、難治癌であっても治癒せしめ得た可能性もあるが、現在の診断法では残念ながら限界に近い。

一方、癌治療の最も大きな障壁は、転移・再発である。この転移・再発を来す癌は、原発巣より悪性度が高いとされ、各種の治療に抵抗性を示すことが多い。また、脳や骨髄に転移したものは全身病としての治療が必要となり、治療に難渋しているのが臨床の現場である。転移・再発を含めたこれらの難治癌を克服するためには、いまブレイクスルーとなるような研究成果が求められてお

り、基礎研究に期待するところが大きい。

筆者は、昨年秋日本癌学会のシンポジウムの世話人に指名され、難治癌をテーマに取り上げた。シンポジウムのタイトルは『難治性癌に対する治療戦略—from bench to bed side—』とし、基礎研究者と臨床医学者との共通認識のもとに難治癌撲滅を目指したいとの意図があった。シンポジウムでは、癌研究会研究所長、北川知行所長の挨拶に始まり、まず難治癌とされる代表的な臓器の癌の実態と現在の治療成績を紹介して頂いた。取り上げた臓器は、肺癌（国立がんセンター中央病院、西條長宏氏）、スキルス胃癌と腹膜播種（金沢大学、米村豊氏）、膵癌（熊本大学、小川道雄氏）、卵巣癌（金沢大学、井上正樹氏）、白血病（愛知県がんセンター）であり、臨床の立場からの現在の治療成績と治療戦略の現場を紹介して頂いた。本シンポジウムの出席者の約70%は基礎研究者ということもあり、難治癌に取り組む日本を代表する臨床医からの報告は、基礎研究者へ臨床の現場を知る上で強いインパクトを与えた。

一方、基礎医学の立場からは、癌の増殖、浸潤、転移の分子機構と転移阻止へのアプローチに関する最新の知見を紹介して頂いた。個々の発表を紹介すると、「細胞増殖シグナル伝達を標的とする治療法」（東京大学、鶴尾隆氏）、「癌転移と接着分子」（愛知県がんセンター、神奈木玲児氏）、「癌転移とMMP」（金沢大学がん研、佐藤博氏）、「癌転移と腫瘍血管新生」（金沢大学がん研、高倉伸幸氏）と題して最近の研究成果と制御機構、そして



日本癌学会シンポジウムにて  
左より、筆者、小林博理事長、  
寺田雅昭総長、佐々木琢磨教授  
(平成13年11月16日、日航ホ  
テル金沢)

治療への将来展望につき紹介された。日本の癌研究の最先端に行く各研究者の発表をお聞きしても、わが国における癌の基礎研究は世界的にみても決して劣ることなく、領域によっては世界をリードする研究成果が多いことを知らされた。

続いて、これらの成果を臨床展開すべく、分子標的治療や癌化学療法の新戦略についてこの方面に造詣の深い臨床の先生に講演して頂いた。「抗転移薬の開発と現状」については、徳島大学、曾根三郎氏から国内外における多数の抗転移薬開発の現況に関する紹介があり、また「遺伝子治療」については、わが国で初めて癌に対する遺伝子治療に成功された岡山大学、藤原俊義氏に治療成績と今後の課題について述べて頂いた。「分子標的治療の臨床評価」については、国立がんセンター中央病院の田村友秀氏、金沢大学の高橋豊氏に講演して頂いた。これらの分子を標的とした治療法は、従来の化学療法とは異なった癌治療へのアプローチで、その多くは cytostatic な薬剤であり、tumor dormancy を視野に入れた治療法として位置付けすべきであろう。

このように、癌治療における基礎と臨床との協

力と関係による探索型臨床研究の必要性が各方面より提言されている。しかし、わが国の研究者による素晴らしい治療薬の発見があっても、外国で治験されるケースが多い。わが国においては欧米諸国に比べ、先端医療・創薬の研究成果を臨床へ展開するシステムが大幅に遅れをとっており、先端医療開発の構築が急務である。このような観点より九州大学、杉町圭哉氏からは「癌研究と translational research」、東京大学、浅野茂隆氏からは「高度先端医療開発拠点の整備」と題して、わが国における探索型医療開発の進め方について迫力ある講演を頂いた。最後に寺田雅昭氏、小林博氏に総括発言を頂き、今後の難治癌克服に当たって基礎、臨床の関係の重要性を説いて頂いた。

このように肺癌、膵臓癌など難治癌対策が最大の課題であり、難治癌の病態を解明し、早期発見と有効な治療法を見つけない限り、癌を克服したとはいえないのではなからうか。21世紀初頭の最も大きな課題である。極めて治療困難な癌や転移・再発癌の実態を総合的に理解し、基礎研究者並びに臨床医学者間の共通認識のもとに、癌撲滅に向けての新たな成果を期待したい。